

滋賀県



東近江市永源寺診療所

永源寺診療所のある東近江市は、平成17年2月11日、八日市市・永源寺町・五個荘町・愛東町・湖東町の1市4町の合併によって誕生。さらに平成18年1月1日には、蒲生町および能登川町と合併し新しい「東近江市」となった。永源寺地区は、県の東南に位置し、ほぼ中央には愛知川が流れ、市原野平野部を要として扇状に展開。東には鈴鹿山脈がそびえる。その扇の要に住民の6～7割が住んでいる。

永源寺診療所長は花戸貴司先生。自治医科大学の18期生。平成7年に卒業後、滋賀医科大学で初期研修、地域中核病院で後期研修を行い、平成12年4月にここに赴任した。

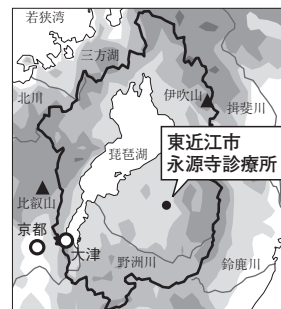
自治医大の卒業生は、地域に出るために通常はスーパーローテート研修を受け、さまざまなプライマリのスキルを身につけるが、花戸先生の大学病院での初期研修は小児科、内科、そして救急を若干。へき地中核病院でも小児科を中心とした研修だった。当然ここにも小児科を基盤としたプライマリ・ケア医のつもりでやってきた。ところがここは高齢化率30%の地域の診療所。前任の医師が内科中心だったこともあり患者は高齢者が多く、赴任した最初の月は、子どもの患者はたったの3人、それも自分の子ども2人とその友達という顔ぶれだったと花戸先生は当時を笑って振り返る。



診療所の後ろに鈴鹿山脈を望む

診療所と隣接する手前の建物が保健センター。今は常時開いているわけではない。

こんなところ
です



もみじの名所として知られる永源寺。秋になると永源寺

一帯は紅に染まります。大本山永源寺の参道ではもみじたちが参拝客を迎え、鈴鹿の山々や、愛知川の水を満々とたたえた永源寺ダム付近も、紅葉狩りの観光客でにぎわいます。永源寺はこんにゃく料理も有名で、開山堂近くには松尾芭蕉が詠んだ「こんにゃくのさしみすこし梅の花はせを」の句碑も立っています。

診療所に来て、話を聞いてもらえるだけで満足して帰っていくお年寄りがいる。そんな人の後ろ姿を見るたびに、では、自分は診療所で一体何をすればいいのか……当初、花戸先生にはそんな戸惑いがあったという。

しかし、ある時、「地域医療は診療だけではない」と思うようになり、予防活動や地域のイベントに積極的に参加した。診療所には保健センターが隣接しており、保健師や診療所の看護師とともに健康教室を開いたり、保育園や幼稚園で講演会を開いたり、診療所に来ない人をより健康にしたいと思うようになった。しかし現在、市町村合併によって保健事業が市の中央に集約されたため、隣接の保健センターが月に数回しか事業を開かなくなった。医療と保健・福祉のつながりが疎となっていることは非常に残念に思う。それでも、地域



花戸貴司先生



冬を待つ除雪車。滋賀県の山間部は雪深く、花戸先生が往診先で雪かきをすることも。





待合室のテレビは小児科医学会の「提言」(右)を貼って封印

- 提言
1. 2歳までのテレビ・ビデオ視聴は控えましょう。
 2. 食事中(授乳中)のテレビ・ビデオの視聴は止めましょう。
 3. 全てのメディアへ接触する総時間を制限することが重要です。1日2時間までに制限しましょう。テレビゲームは1日30分までを目安としましょう。
 4. 子ども部屋にはテレビ、ビデオ、パーソナルコンピュータを置かないようにしましょう。
 5. 保護者と子どもでメディアを上手に利用するルールをつくりましょう。
- 2004.02 小児科医学会「子どもとメディア」の問題に対する提言



風邪などの急性疾患のみ院内処方

に溶けこみたいと思う気持ちから、最近では小学校で本の読み聞かせのボランティアにも参加している。

「子どもとお年寄りの違いは、子どもは正直で嘘をつかないという点です。具合が悪ければぐったりし、よくなると昨日まで寝込んでいたのにもう学校へ行くといい出します。しかし、お年寄りも嘘をつこうと思ってついているわけではない。その人の心理的な背景、家族背景、社会的な背景などを総合的にみるとお年寄りの言っていることや行動も正直だと思えます。そういう部分をみないで、病気だけをみていると、あの人は嘘をついている、あるいは訴えが多いということになる。そういう背景まで気を配れ、正直に話すことのできる人間関係を築くことが地域医療を行う医師の仕事かなと思います」と、今、花戸先生は言う。

花戸先生は3年前に自治医大の義務年限を終了したが、その後もここに残った。一この永源寺地域で、大病院ではできない、地域の診療所でならでできることをしていきたい。

長くいると徐々に「慣れ」、悪く言うと「マンネリ」が生じてくる。地域にいながらでもバージョンアップが必要と感じ、学生やレジデントの地域研修を積極的に受け入れ、外の空気を入れている。学生や研修医にも老人教室などに一緒に参加してもらい、「地域」を知ってもらっている。

現在、外来患者は1日平均60～70人。月にすると平均750～800人。最近では小児科専門医がいてと知って、永源寺以外の地域からも子どもの患者がくるようになり、6年前にはたった3人だった子どもの患者は、月平均150～200人になったという。

待合室には絵本がたくさん置かれている。以前は待合室でテレビをつけていたが、待っている時間を利用してぜひお母さんと一緒に絵本を読んでもらいたいと思い、テレビをつけるのをやめた。今、診察室の中でも耳を澄ますと、待合室の子どもの声、お母さん同士の話し声、そしてお年寄りの患者さんの話し声が聞こえてくる。それがまたそれぞれの患者の背景を知る手がかりとなっている。テレビをつけるのは、台風や地震などの緊急時のみと決めていたが、北朝鮮のミサイル発射のニュースが流れたときはさすがにつけたと先生は笑う。

往診は午前の外来終了後、午後の外来までの間に基本的に毎日行っている。定期往診は現在31軒。近くの老人ホームの嘱託医にもなっており、週1回は診療に行く。

その日は、92歳の脳梗塞後遺症のおばさんのところから、急な往診の依頼があった。「頭が情けない(すっきりしない)」とおばさんは先生に訴える。同行した看護師の横田さんが「私の方がよっぽど病気になるよ」というと、おばさんは心配そうに「大事にしてえや」と声をかけていた。寂しがりやなんだと先生は話す。先生の顔をみてすっかり安心して看護師さんを気遣う余裕が出たようだ。



老人保健施設「もみじ」へは週に1回、入居者の様子を見に行く



頭が情けないと訴える患者さん

次に行ったお宅は、86歳の一人暮らしのおばあさんのお宅。おばあさんは足が不自由で、寒くなると足先の血液の流れが悪くなる。先生は危ないところはないか、家の中を見て歩く。看護師さんと相談して「お湯で足を洗ってもらわなければダメ」と、これまで週1回だったヘルパーを週2回にするように説得する。実はこの患者さんは若干認知症があるので、足の状態以外にも服薬管理、安否確認など様子を観てもらうことが目的である。

次は拡張型心筋症と肺気腫による心不全、呼吸不全で、在宅酸素療法をしているおじいさんのお宅に訪問した。今回はインフルエンザの予防接種も行った。帰り際、孫の男の子が学校から帰ってきた。その男の子も病気になると診療所にかかっている。でも自分の注射ではないと知るや、余裕の表情で先生に手を振っていた。

「初めて在宅でターミナルを見たときに、『何もしない』ことで家族の方にあきらめてもらうことになると思いました。病院でならあれもこれもできるのに、それをしないのはあきらめることではないかと。ところがある時、ホスピスの先生と話していて、『それはあきらめるのではなく、人にはだんだんエンディングを迎える時期というのがあるって、そういう時期なのだということを周囲の人に理解してもらい、医者は安心して終末期を迎えられるこ



ヘルパーを週2回にするように患者さんに話す



在宅酸素療法をしている患者さんに「苦しくない?」と話しかける花戸先生



とを保証するだけ』と言われ、本当にそうだと思います。傍らに座り、患者さんや家族の話に耳を傾け、ともに悩み、そして笑う。それだけで十分なのではないかと思えます」と話す花戸先生。大病院ではできない、地域の診療所でしかできないことは、まさにそういうことかも知れない。



左から事務の小杉一子さん、武士田綾子さん、看護師の横田富美子さん、小沢佐江子さん、小泉加奈枝さん、そして花戸先生。

東近江市永源寺診療所

〒527-0231 滋賀県東近江市山上町1352

TEL: 0748-27-1160 ●所長 花戸貴司